

はじめに

北海道大学理学部 赤石 義紀

荷電粒子核反応データベースの作成を文部省事業費で行うようになってから2年が経過した。ここに、第2年度の報告書をまとめ、これまでの到達点を示すことにした。各章は、学術雑誌に相当する内容を持つよう、国内助言委員の方々2名ずつにレフェリーをお願いした上で掲載したものである。

さて、データベースには、作成と利用の2つの面がある。作成については、管理運営委員会及び全国助言委員会のもとに関係各位のたゆまぬ努力によって予定通り作業が進展してきた。今回、これまで収録したデータの範囲と量を明示することにした。収集・入力データの質をいかに良くするかは大切な問題であり、そのための試みについてもふれることにした。良質のデータベースを育てそれが広く利用されるようにするためには、はっきりした範囲でデータに網羅性をもたすことが要求される。国内生産データを網羅し安定的に収録するために、協力体制を一まわり大きくする必要があり。これは、次年度の主な課題としたい。

利用面からいえば、データベースはデータ量が相当量に達してはじめて有効なものとなりうる。経費や作成体制の規模からの制約もあって年間作成しうるデータ量は決して多いとはいえないが、ねばり強く続けていくことが将来の有用性につながるものと考えている。大きくみれば、各専門分野での研究を発展させることとならんでその利用にも各国それぞれが責任を持つ時代になってきている。日本が知的生産において大きな比重をもつに至った今日、データベース作成での責任も少なくない。長期に安定したデータベースを維持するためには国際協力が不可欠である。そこで、国際的核データ活動と我々との関わりについてもこの報告書で言及することにした。

今回、多くの頁をとって現在のデータ蓄積量と内容とを示した。これは、具体的に利用を考える際に参考となる資料である。限られたデータの範囲ではあっても出来るだけ利用効果が大きくなるようデータベース作成の方向付けを行っていきたい。多くの方々からの率直な御意見と御批判を遠う次第である。